



第21集

令和7年3月

山形県教育局義務教育課

# はじめに

平成14年度、「少人数学級編制」を小学校全学年へ導入する“教育山形「さんさん」プラン”が、全国に先駆けてスタートしてから20年が経過しました。「さんさん」には、21世紀の山形の教育が「燦燦」と輝く太陽のように明るく希望に満ちたものになるよう、そして、子ども一人ひとりを温かく包み込み教室いっぱいに笑顔が広がるようにという願いが込められています。

この願いの下、多様化・複雑化する教育課題に対応するために、平成23年度に小中学校の全ての学年において「少人数学級編制」を全面実施することを皮切りに、小1プロブレムの解消をねらいとした「小学校低学年副担任制」や、別室登校生徒等への学習支援のための「別室学習指導教員」の配置、特別支援学級における学級編制基準の引き下げなどの教育環境づくりを行ってまいりました。

各学校におかれましては、きめ細かな指導の充実により、子ども一人ひとりの能力を最大限に伸ばし、「わかる授業」と「いじめや不登校のない楽しい学校」の実現に向けて、日々、ご尽力いただいていることに感謝申し上げます。

「さんさんガイド」第21集には、“教育山形「さんさん」プラン”の各制度における優れた実践が収められております。各校の課題に対して組織として取り組まれている実践事例は、県内の各学校においても大いに参考になるものと期待しているところです。

後半には、各教育事務所が各地区の授業改善の取組みなどをまとめた「“教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント」を掲載しておりますので、学習活動をより充実させるための参考にさせていただきたいと思っております。

最後になりましたが、第21集の作成にあたり、多くの市町村教育委員会と小中学校等の御協力により、すばらしい教育実践の成果をまとめていただきましたことに感謝申し上げます。

令和7年3月

山形県教育局義務教育課

課長 高橋 典子

# 目次

---

## はじめに

### I 少人数学級編制等推進事業について

- ・令和6年度“教育山形「さんさん」プラン”基本方針と施策内容、  
令和6年度「教科担任マイスター制度」の概要..... 2
- ・令和6年度「教科担任マイスター育成研修」、グループ研修一覧..... 3
- ・子ども同士が精一杯考え合い 表現し合う授業をめざして..... 4
- ・令和6年度“教育山形「さんさん」プラン”に係る学校訪問..... 6

### II “教育山形「さんさん」プラン”の各施策について

#### 1 各学校の実践事例

##### ■少人数学級編制

- きめ細かい学習指導と教科担任制の充実【新庄市立明倫学園】..... 8
- 個別最適な学びに向けた学習指導と生徒支援【庄内町立立川中学校】..... 10

##### ■特別支援学級編制基準引き下げ

- 少人数を生かし、個の自立を目指す【河北町立谷地中部小学校】..... 12

##### ■小学校低学年副担任制

- 多人数単学級の中で一人ひとりを見取る指導体制の確立【鶴岡市立藤島小学校】..... 14

##### ■中学校別室学習指導教員

- 生徒一人ひとりが安全安心を感じられる別室を目指して【米沢市立第三中学校】..... 16

##### ■教科担任マイスター制度

###### 小学校 教科担任マイスター

- 外国語教育の充実と令和の日本型教育の実現に向けた実践【天童市立津山小学校】..... 18
- 教科担任制の推進と日常のOJTの活性化【新庄市立日新小学校】..... 20

###### 中学校 教科担任マイスター

- 確かな学力を育成するための教科担任マイスターを核とした授業改善の取組み  
【飯豊町立飯豊中学校】..... 22

#### 2 “教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント

- 村山教育事務所..... 24
- 最上教育事務所..... 26
- 置賜教育事務所..... 28
- 庄内教育事務所..... 30

# I 少人数学級編制等推進事業について

# 令和6年度「教育山形「さんさん」プラン」

## 1 基本方針

- (1) 少人数学級編制【小学校1年生～中学校3年生】 ※小学校では令和7年度まで段階的に、国の学級編制の標準が40人から35人に引き下げ
- (2) 特別支援学級 学級編制基準の引き下げ（8人→6人）
- (3) 小学校低学年副担任制（喫緊の課題への対応）
- (4) 別室学習指導教員（喫緊の課題への対応）
- (5) 教科担任マスター制度（学力向上施策）
- (6) 中学校指導方法工夫改善の実施

## 2 施策内容

小 学					中 学			
小1	小2	小3	小4	小5	小6	中1	中2	中3
国：35人以下学級					国：40人以下学級			
(1) 少人数学級編制（18人～33人）					(1) 少人数学級編制（21人～33人）			
非常勤講師を配置 ※小3～小5で1学級34・35人の学級と小6で1学級34～40人の学級があるとき、その学級数が1～2学級の場合1人、3～4学級の場合2人 ※中1・34人～40人の学級1つに対して1人 ※中2～中3：34人～40人の学級が1～2学級の場合1人								
(3) 小学校低学年副担任制 ※学年の人数が、34・35人の場合は、副担任として、非常勤講師を配置					(4) 別室学習指導教員 ※別室登校生徒の支援のための非常勤講師を配置			
小学校専科指導のための国加配 〈英語専科指導、英語以外の専科指導、教科担任制推進分、小中一貫・連携教育分〉					(6) 指導方法工夫改善 ※指導方法工夫改善のための常勤講師等を配置			
(5) 教科担任マスター制度 【算数、英語における授業改善とOJTの充実】 ※校内OJTをマネジメントする教科担任マスターを任命し、教科担任制を推進 ※教科担任の後補充として授業を行うとともに、教科担任マスターの業務を支援するための非常勤講師を配置 ※R6学力向上計画書の内容を受け、配置校を決定（原則、小学校専科指導のための国加配と重複しない）					(5) 教科担任マスター制度 【数学、英語における授業改善とOJTの充実】 ※校内OJTをマネジメントする教科担任マスターを任命し、小中連携やタテ持ち <sup>(注)</sup> を推進 ※数学または英語の授業を行うとともに、教科担任マスター業務を支援するための非常勤講師を配置 ※R6学力向上計画書の内容を受け、配置校を決定			
(2) 特別支援学級 学級編制基準の引き下げ（8人→6人） ※学級の人数が7～8人の場合は、1学級増加で算勤を配置								

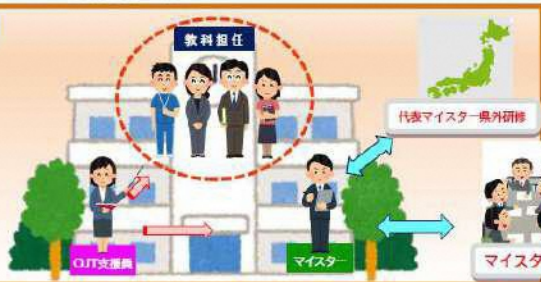
(注) タテ持ち…1人の教員が複数学年を担当する指導体制

# 令和6年度「教科担任マスター制度」の概要(全体)について

## ねらい

- ・研究リーダーを育成するとともに研修環境を充実することでOJTの実効性を高め、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善を推進する。
- ・算数・数学、英語の深い教材研究を通して教科指導力の向上を図るとともに、児童生徒の学習内容の理解度・定着度の向上と学びの高度化を図る。

## 小学校



## 中学校



- ◆教科担任推進マスター（教科担任が兼ねてもよい）
- ・算数または英語の教科担任制を推進し、時間割の調整等を行う。

例)

年組	担任	算	英	理	国	社	休	外	道	徳	新	教員数	教材準備数	
5-1	A	A	担外	A	O支	A	A	A	A	A	A	23	5	
5-2	B	A	担外	O支	B	O支	B	B	B	B	B	23	5	
6-1	C	C	O支	O支	担外	C	C	C	C	C	C	5	24	
6-2	D	D	E	C	D	O支	D	O支	担外	E	D	D	22	5
6-3	E	E	O支	O支	担外	O支	担外	E	E	E	E	6	24	

O支：OJT支援員 (週2時間の場合)

- ・授業参観による指導・助言、示範授業により授業改善の取組みを推進する。
- ・校外の研修会に参加して校内に還元し、OJTの実効性を高める。など

- ◆教科担任（教科担任推進マスターが兼ねてもよい）
- ・教材研究の深化により、専門知識や技能を高める。
- ・複数学級で質の高い授業を行い、児童の学びの高度化を図る。
- ・教材や資料を蓄積・共有し、教科指導力の向上を図る。
- ・学年会議等で、学級担任と児童の様子などについての情報を共有する。など

- ◆OJT支援員（教員免許状を有する非常勤講師）
- ・教科担任が他の学級で授業をするときに、代わりに授業を行う。
- ・マスター業務（授業参観、示範授業、研修会等）の後補充を行う。
- ・教科担任のサブティーチャーとして、授業に参加する。など

- ◆教科担任推進マスター（数学、英語担当教員が兼ねてもよい）
- ・学区内の小学校との連携を推進し、小中連携の計画を立てる。
- ・数学または英語のタテ持ちを推進し、時間割の調整等を行う。

例)

	1組	2組	3組	4組	5組
3年	O支(・A)	A・O支	A・O支	A・O支	※3年は 習熟度別学習
2年	O支(・A)	B	B	C	C
1年	B(・A)	B	B	C	C

- ・授業参観による指導・助言、示範授業により授業改善の取組みを推進する。
- ・校外の研修会に参加して校内に還元し、OJTの実効性を高める。など

- ◆数学、英語担当教員（教科担任推進マスターが兼ねてもよい）
- ・学区内の小学校で、算数、英語の教材研究や授業づくり等を協働的に行う。
- ・また、実際に授業（TT指導等を含む）を行う。
- ・系統性を踏まえた授業づくり等のために、教科部会を時間割に位置付ける等、充実を図る。

- ◆OJT支援員（中学校教員免許状（数学または外国語）を有する非常勤講師）
- ・数学または英語の授業を行う。
- ・マスター業務（授業参観、示範授業、研修会等）の後補充を行う。
- ・数学、英語担当教員が小学校訪問する際の後補充を行う。など



# 令和6年度「教科担任推進マイスター育成研修」と「小中連携」について

研修の目的：専門性の高い教科指導を行い教育の質の向上を図る教員の育成により、県内全体の教員の資質向上を図る。

**育成研修（小・中マイスター）** 校内の研究リーダーである教科担任推進マイスター自身の資質・向上のための研修会に参加する。

**ベーシック研修** 【筆算や研修について理解する】  
 ① 教科担任推進マイスターの業務及び算数・数学、英語の学力向上施策について共通理解を図る。  
 ② 小学校高学年における教科担任制、中学校におけるタテ持ち及び小中連携を通じた教科指導力の向上の取組みについて、実践をもとに協議・交流する。また、講師から指導・助言を受ける。  
 ③ 研修の成果をまとめ、県内すべての学校に発信する。

**ベーシック研修①**  
 ・小学校37名、中学校5名  
 ・1日（4月中旬）  
 ・県教育センター  
 ・事業説明：各教育事務所体制づくり  
 ・研修（教科指導力の向上）  
 ・地区別協議

**ベーシック研修②**  
 ・小学校37名、中学校5名  
 ・1日（8月下旬）  
 ・県教育センター  
 ・実践事例発表・協議  
 ・講師による指導・助言  
 ・地区別協議

**ベーシック研修③**  
 ・1日又は半日（2月下旬）  
 ・各教育事務所  
 ・研修の実績報告  
 ・各学校での取組みを共有

**グループ研修（県内研修、県外滞在研修）**  
 【優れた実践について、共に研修する】  
**<県内研修>**  
 ○マイスター所属校を訪問し、算数・数学、英語における教科指導力向上の視点を踏まえ、授業改善に資する研修を行う。  
 ○深い教材研究に根ざしたきめ細かな指導と中学校の学びに繋がる体系的な指導の充実について協議する。  
 ○小・中学校間の円滑な接続に向け、小中連携の実践から成果と課題を共有し、自校の取組みに生かす。  
**<県外滞在研修>**  
 ○8名のマイスター（小学校）と指導主事2名が、3グループに分かれ、教科指導について優れた実践をしている他県の学校に1週間滞在し、深い教材研究と指導の充実等について研修する。

**グループ研修（県内研修）** 【対象：全小中学校のマイスター】  
 ・各地区で3～5人のグループを編成し、各テーマに関する協議  
 ・グループ内の学校に1回ずつ訪問  
 ・授業参観、教科指導力向上に向けた協議  
 ※義務教育課、教育事務所の指導主事も状況に応じて参加

**グループ研修（県外滞在研修）** 【対象：小学校のマイスター代表8名、指導主事2名】  
 ・5泊6日（福井県、秋田県、静岡県を予定）  
 ・主体的・対話的で深い学びの実践に向けた教材研究・児童理解・校内研究体制等について研究



**校内研修の運営・推進** 【各教育事務所の実態に応じて】  
 【自校における組織的な授業改善を推進する】  
 ・自校の教諭の資質・能力を高める研修のあり方を研修する。

自校での実践と研修の往還  
**校内研修の運営・推進** ⇒ 日常的な授業改善による教科指導力の向上  
 ・教科担任制のコーディネート（小） ・ タテ持ち、小中連携のコーディネート（中）  
 ・他学級の授業参観 ・ 自身の授業公開 ・ 校外研修等で収集した情報の還元 など

研修総日数  
10日程度  
※県外滞在研修を除く

**小中連携（中学校教員）** 中学校教科担任推進マイスターのコーディネートにより、中学校の数学、英語の教員が小中連携交流を図る。

**小中連携** 【育成を目指す資質・能力を共有し、小学校との連携を図る】  
 ・学区内の小学校と小中連携を推進し、算数、英語における系統性を踏まえた授業づくりや指導方法について共通理解を図る。  
 ・中学校教員が算数、英語で授業（T・T指導を含む）を行う。  
 ・Zoom等を活用したオンライン協議（全国学調の分析や学習指導要領に基づいた指導と評価の在り方等）

**域内の小学校等との連携**  
 ※教科担任推進マイスターを中心に学区内の小学校と日程や内容を調整し、相互学校訪問やオンライン交流を実施  
 ・中学校の数学、英語の教員が訪問等を行う（原則月2回）  
 ・小学校教員とともに、算数、英語の教材研究や授業づくり等を行う  
 ・算数、英語の授業（T・T指導等を含む）を行う

原則月2回

## 教科担任マイスター グループ一覧

### 【小学校】

グループ	マイスター配置校
村山A	山形市立第四小学校
	上山市立上山小学校
	西川町立西川小学校
	寒河江市立三泉小学校
	山形市立宮浦小学校
村山B	寒河江市立南部小学校
	寒河江市立柴橋小学校
	尾花沢市立尾花沢小学校
	朝日町立西五百川小学校
村山C	河北町立北谷地小学校
	東根市立長瀬小学校
	大石田町立大石田北小学校
村山D	山形市立第七小学校
	山形市立村木沢小学校
	天童市立津山小学校
	東根市立小田島小学校
最上A	新庄市立日新小学校
	舟形町立舟形小学校
	戸沢村立戸沢学園
置賜A	米沢市立万世小学校
	米沢市立南原小学校
	川西町立小松小学校
	飯豊町立第二小学校

グループ	マイスター配置校
置賜B	米沢市立窪田小学校
	米沢市立上郷小学校
	白鷹町立蚕桑小学校
	小国町立小国小学校
	鶴岡市立上郷小学校
庄内A	鶴岡市立藤島小学校
	酒田市立広野小学校
	酒田市立新堀小学校
	酒田市立十坂小学校
庄内B	鶴岡市立大山小学校
	鶴岡市立湯野浜小学校
	酒田市立浜中小学校
	酒田市立西荒瀬小学校
	三川町立押切小学校

### 【中学校】

グループ	マイスター配置校
村山	天童市立第三中学校
	大石田町立大石田中学校
最上	舟形町立舟形中学校
置賜	飯豊町立飯豊中学校
庄内	酒田市立第二中学校



# 子ども同士が精一杯考え合い

## 個の能力を最大限に伸ばす

「個別最適な学び」と「協働的な学び」という観点から、学習活動の充実の方向性を改めて捉え直し、ICTの新たな可能性を指導に生かすことで、主体的・対話的で深い学びの実現に向けた授業改善につなげていく。

### ～ 学習意欲を喚起し、考えや解決の見通しを持たせる「課題提示」 ～

- 日常場面や生活との関連を図った魅力的な教材や高みの問題を提示し、一人ひとりが主体的に学習に取り組むことができるように工夫する。
- 「問題を自力で解く・他者と関わりながら解く」「教材文を読み、考えを書く」「事象・現象・情報を分析する」「観察・実験を行い、考察する」「体験する」等を効果的に取り入れ、一人ひとりが自分の考えや解決の見通しを持つことができるようにする。

### ～ 互いの考えが認められ、目的に応じて練り上げられる「学び合い」 ～

- 互いの考えを出し合わせ、友達と考えとの共通点や相違点をもとに話し合わせたり、誤答を生かした学習活動を取り入れたりとすることで、児童生徒が自分の考えを広げたり深めたりできるようにする。
- ねらいに応じて、記録、要約、批評、説明、論述等の言語活動を取り入れ、児童生徒の学び合いが深まるようにする。

### ～ 子どもの考えを生かした「納得感のあるまとめ・振り返り・練習」 ～

- 本時のねらいに沿った自分なりの「まとめ」、できるようになったことやよくわからないこと、今後さらに学んでいきたいこと等を確認する「振り返り」、より深い理解に向かう効果的な「練習（問題）」を通して、学習内容を確実に定着できるようにする。
- 自分の見方や考え方の変容を認識し、次の授業や家庭学習への意欲を喚起できるようにする。

## 学級規模を生かす

### ～ 少人数のメリットを生かした授業 ～

- 教員が一人ひとりと丁寧に向き合える環境を生かして、児童生徒のニーズを的確に捉えるとともに、ユニバーサルデザインの視点を取り入れることで、必要なときに、適切な内容で的確に支援できるようにする。
- 小集団に分かれての学習では、それぞれの様子が把握しやすいことや的確に助言できることを生かし、児童生徒が主体的・協働的に課題を解決する探究型学習等を充実する。



# 表現し合う授業をめざして



## ～ 複式学級の特徴を生かした授業 ～

- 直接指導・間接指導の特性や接続に配慮し、目的意識や見通しを持たせ、児童生徒が主体的・協働的に課題を解決できるようにする。
- 異学年間の伝え合いや学び合い、発表の場を学習計画に取り入れ、関わりの中で互いを高め合うことができるようにする。

## ～ 多人数学級における協働的な指導の工夫 ～

- コース別学習やチーム・ティーチング等の指導の工夫ができるように教員の協力体制を機能させ、個に応じた指導の充実を図る。

## 変化する時代を生きぬく力を育む

### ～ 人間関係を豊かにする自己表現力やコミュニケーション能力の育成 ～

- 対話的な学習活動を充実させ、児童生徒が他者の考えを受け入れながら自らの考えを広げたり深めたりできるようにする。
- 児童生徒が異なる文化や生活習慣、障がいの有無等の違いを認め合い、協調しながら、互いに支え合い、高め合う関係づくりができるようにする。

### ～ 一人ひとりの勤労観・職業観を育むキャリア教育の充実 ～

- 発達段階に応じて職業人、社会人、文化人等の生き方に触れ、児童生徒一人ひとりが自らの在り方や生き方に向き合うことができる学習を充実させる。
- 職場体験やインターンシップなどの体験的学習の教育的価値を一層高めるよう実施方法、内容を工夫する。

### ～ 数学的な見方で考えることのよさを実感できる算数・数学の授業 ～

- 充実した数学的活動を通して、児童生徒が学んだことを生活や他の学習に活用し、学ぶ意欲を高めるとともに、数学的な見方で考えることのよさを実感できるようにする。

### ～ 科学への関心を高め、科学的な見方・考え方を働かせて課題を解決する理科の授業 ～

- 身近な生活との関連から学習内容を充実させ、児童生徒一人ひとりが目的を持って観察・実験等を行うことにより、科学への関心を高めるとともに科学的な見方・考え方を働かせて課題を解決する力を育む。

### ～ 小中高の接続を意識した外国語教育の展開 ～

- 各学校段階における目標や基本的な考え方を十分理解し、小中高の接続や学習経験を踏まえた外国語教育の充実を図る。
- 特に、中学校においては、小学校で育まれたコミュニケーション能力の基礎を十分に踏まえた指導を工夫する。



少人数学級編制等推進事業

令和6年度“教育山形「さんさん」プラン”学校訪問

1 目的

“教育山形「さんさん」プラン”推進に関して、県教育委員会の事業担当者が県内の該当校を訪問し、事業の取組み状況を把握するとともに、学校が抱える課題や要望等を明らかにして、今後の事業推進に反映させる。

2 対象校

- (1) 「教科担任マイスター制度」に該当している小学校（地区1校）
- (2) 「教科担任マイスター制度」または「少人数学級編制」に該当している中学校（地区1校）

3 訪問期間 7月～11月

校種	小学校	中学校
区分	教科担任マイスター制度	教科担任マイスター制度 少人数学級編制
村山	東根市立長瀬小学校	大石田町立大石田中学校
	9月19日（木）	
	9：30～11：30	13：30～15：30
最上	戸沢村立戸沢学園	新庄市立萩野学園
	11月5日（火）	
	9：30～12：00	13：30～16：00
置賜	川西町立小松小学校	飯豊町立飯豊中学校
	8月28日（水）	
	13：30～16：00	9：30～12：00
庄内	三川町立押切小学校	酒田市立第二中学校
	10月9日（水）	
	13：30～16：00	9：30～12：00

## Ⅱ “教育山形「さんさん」プラン”の各施策について

<b>少人数学級編制</b> <b>きめ細かい学習指導と教科担任制の充実</b> <b>新庄市立明倫学園</b>
--

## 1 本校の実態

本校は令和3年に小学校及び中学校の3校が統合し、県内2番目の義務教育学校としてスタートした。義務教育学校のメリットでもある1年生から9年生までの様々な形態での交流や、前期ブロック（1～4年）、中期ブロック（5～7年）、後期ブロック（8～9年）の3ブロック制を取り入れることによるリーダー学年を3回経験できる学校である。

また、低学年でも一部取り入れてはいるが、中期ブロックから教科担任制を本格的に導入している。このような環境の中、定数が改善された5年生とともに、少人数学級編制の対象となる6年生については教科担任制の充実を図っているところである。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

- ① クラス数増加によるメリットを生かし、子どもたちに豊かな学びを保障するために教科担任制の充実を図る。
- ② 少人数を生かしたきめ細かい学習指導、生徒指導を行う。

### (2) 具体的な取組み事例

#### ① 教科担任制の充実

担任が一人増えたメリットを生かして、下記のように教科担任制に取り組んだ。  
(下図参照)

	標準時数	6 A	6 B	6 C
国語	175	6 C 担任	6 C 担任	6 C 担任
社会	105	中期教頭	中期教頭	中期教頭
算数	175	6 A 担任	6 A 担任	6 A 担任
理科	105	6 B 担任	6 B 担任	6 B 担任
音楽	50	後期課程音楽教員	後期課程音楽教員	後期課程音楽教員
図工	50	後期課程美術教員	後期課程美術教員	後期課程美術教員
家庭	55	中期教務	中期教務	中期教務
体育	90	6 A 担任	6 B 担任	6 C 担任
道徳	35	6 A 担任	6 B 担任	6 C 担任
学活	35	6 A 担任	6 B 担任	6 C 担任
総合的な学習の時間	90	6 A 担任	6 B 担任	6 C 担任
外国語	70	専科 + 6 B 担任	専科 + 6 B 担任	専科 + 6 B 担任

複数クラスで同単元の授業を展開する中学校教員は、即座にPDCAを繰り返すことで教材研究に深まりが生まれる。一方、担当教科数も多く、自学級で授業することが多い小学校教員は、同様にPDCAを行うことは困難であることが多い。本校では、少人数学級編制により3学級にしたことで、前期課程でも3回の授業を行うことができる。そのため、通常では自分の授業の検証を「同じクラスで違う単元」という形でしか行えない所を、「違うクラスで同じ単元」という比較で検証をすることができるようになり、その分教材研究に深まりが出た。

## ② きめ細かな学習指導

6年生は在籍が71人のため、本来であれば35～36人の2クラスとなり、それぞれの学習に寄り添うことが難しくなる場所である。また、グループの数も9グループとなり、学級全体での交流時間の確保も難しくなる。しかし、少人数学級編制により23～24人の3学級になり、担任団が児童一人ひとりにきめ細かい指導を行い、学習の質の向上につなげてきた。

- ・ 算数 データの特徴を調べて判断しよう「データの調べ方」

メディア時間について自分のデータと学級全体のデータを比べる学習を行った。その際、自分のデータを分析した後に、グループ内での交流や学級全体での交流を通してデータ比較を行った。グループ数が少ないために、友達の分析にも目が向きやすくなり、データ比較を通して自分自身の生き方にまで考えを深めるなどの学びが展開された。

- ・ 理科 「水溶液の性質」

場所や器具が限られているため、人数が多いと児童が思考を深めるために十分に実験に取り組むことができない。しかし、少人数学級により、課題に対しての仮説を確かめる実験を存分にすることで、グループ内での議論が活性化し、児童自身が自己の学びを調整していく姿が見られた。

- ・ 体育 「水泳」

本人の泳力に合わせた班編成が可能になり、自分の課題に合わせた練習にたくさん取り組むことができた。教員もそれぞれの児童の実態を見取り、適切な指導や声かけを行うことができた。また、ボランティアの保護者と連携しながら、安全の確保に努めることができた。

## ③ きめ細かな生徒指導

すべてのクラスに入り、複数の目で子どもを指導することにより、小さな変化にも気付くことができ、情報を共有し、学年や担任以外の教員ともつながり相談することで、効果的な生徒指導につなげている。

## 3 成果（○）と課題（△）

- クラスの数が増えることにより、教科担任制を行うメリットがさらに生かされ、教材研究の深まりが生まれた。
  - 教科担任制を行うと2クラスよりも3クラスの方が、1人の担当する教科数が減るため、授業の準備の負担も大幅に軽減され、働き方改革にもつながった。
  - 少人数学級編制のメリットを生かし、子ども一人ひとりのニーズを把握し、関わることができた。
  - 一つのクラスを多くの教員の目を通して見ることで、多様な観点から児童を観察・指導するため、児童理解が進み、生徒指導上の効果は高い。また、児童は様々な教員の関わりがあるため、悩みの相談などについても複数の選択肢があり、安心感が高い。
- △ 少人数学級編制により、教科の専門性が高まっているが、日常的に行われている後期課程の教員との意見交換をさらに活性化し、指導力の向上につなげていきたい。



# 少人数学級編制 個別最適な学びに向けた学習指導と生徒支援

庄内町立立川中学校

## 1 本校の実態

本校は全校生徒数 83 名（1 学年 25 名、2 学年 18 名、3 学年 40 人）で、学級数は 5 学級（1～3 年各 1 学級、特別支援学級 2 学級）であり、3 学年が少人数指導教員の配置に該当する。学区内には認定こども園 1 園、小学校 1 校があり、10 数年同じ顔触れで生活しており、男女分け隔てなく仲がいいが、競争心や切磋琢磨する雰囲気や育ちにくい面もあると感じている。

本校の生徒は、授業では他者と関わりながら意欲的に取り組める生徒が多い。しかし既習事項の定着や理解度の差が大きく、基礎・基本の定着に課題がある生徒が多いため、授業者だけではきめ細かな指導や対応が難しい教科もある。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

- ① 英語学習において定着度や理解度に差が見られるため、全学年において全授業で T・T 指導を行い、基礎学力の定着を図り学力向上を実現する。
- ② 担任を含めた複数教員による生徒支援を行うため、1 学年の副担任として配置し、中一ギャップを未然に防止し、生徒の心の安定を図る。

### (2) 具体的な取組み事例

- ① 生徒の実態に合わせた T T 指導

#### 【T 2 による机間指導】

T 1 がメインティーチャーとして授業を進め T 2 が机間指導を行い、課題把握に戸惑っていたり、課題解決の途中でつまづいてしまったりしている生徒に対して、個別の支援を行う。教員が 2 人で指導にあたることで、生徒に声かけできる人数や回数が増え、適切な支援につなげることができる。

ペア活動やグループ活動においては、活動の充実に向けて機会を逃すことなく助言をしている。特に、ペア活動においては、T 1 と T 2 が模範を示すことで、生徒はイメージしやすくなり、活動の活性化につなげることができる。



#### 【学級を等質 2 分割した授業】

3 学年は 37 名おり、一人ひとりを見取ってきめ細かな指導を行うことが難しいため、学級を 2 つのグループに分けて授業を行う。そうすることで、少人数指導が可能となり、より丁寧に生徒の実態を把握し指導に反映させ、わかる授業を展開することができる。また、授業の途中や終わりに形成的評価を適切に行うことで、生徒の実態によって授業展開を修正したり次時の授業に反映させたりして、

わかる授業につなげることができる。また、指導者同士で生徒の反応、理解度やつまづきを共有することで、指導者の研鑽にもつなげることができる。さらに、英語の授業ではペア活動や教え合いが有効であり、学級を等質2分割することで、活動の活性化が見込める。

## ② 担任業務の軽減

どの学年も1学級（通常学級）であり、学級経営に関する業務を担任同士で分担することができない。そのため、担任業務の負担が1人の教員に集中する傾向にあるが、少人数指導教員が業務の一部を担うことで解消している。具体的には、テスト計画に向けたワークシート作成や提出物の取りまとめ、給食指導等を行い担任を支援している。

## ③ 多様な視点による生徒理解

中学生は多感な時期であり、悩みや心配事を抱えている。しかし、悩みや心配事を聞いて欲しいという思いを持ちつつも、誰にでも話せるわけではない。担任には話しづらい生徒も少なからずいる中、担任ではない少人数指導教員に対しては抵抗なく話せる生徒もいる。担任だけではなく多くの教員が生徒に関わり、思いを受け止めることは大切であり、生徒理解を深めることで適切な生徒支援につながることができている。また、少人数指導教員が知り得た情報については担任と共有することで、複数教員による支援が実現できている。

## 3 成果（○）と課題（△）

### ○個別最適な学びの実現

学級の実情に応じた柔軟的なT・T指導により、生徒個々の状況を捉え、適切に支援することができた。学期末に行った授業に関するアンケート結果を1学期末と2学期末で比較すると、英語の理解度については「2年生：27.8%→61.1%」「3年生：61.2%→88.9%」と上昇しており、理解度が増したことが分かった。理解度の高さやわかる授業が意欲的な学習につながり、好循環を生み出した。

### ○生徒と向き合う時間の確保

担任業務の軽減により、生徒と向き合う時間が確保され、個々に寄り添った生徒支援や多様な視点による生徒支援ができた。いじめについては早期に発見して対応することができ、円滑に保護者と連携をとり解消することができた。また、本校の不登校生徒数の出現率は、令和5年度の県の数値を大きく下回っている。担任業務を軽減することで心にもゆとりができ、「生徒のよいところ」だけでなく、「生徒を認めようとする視点」で適切な声かけや支援をすることができた。

### △特定教科での支援に限定

今年度は英語の教員が配置され、多くの成果を挙げるすることができた。しかし、全国学力・学習状況調査やNRTでは他教科にも課題が見られたが、持ち時数の関係や中学校で教える内容の専門性から、英語での支援に限定されてしまった。通常学級における特別な支援を要する生徒の増加もあり、複数人数・複数教科の配置が実現できれば、さらに個別最適な学びを推進することができ、きめ細かな支援ができると考える。

# 特別支援学級 学級編制基準の引き下げ 少人数を生かし、個の自立を目指す

河北町立谷地中部小学校

## 1 本校の実態

本校は児童数 382 名、通常学級が 14 学級、特別支援学級が 4 学級（知的 2、情緒 2）で計 18 学級である。内、5 年生が 68 人で少人数学級編制弾力化加配により 3 学級、特別支援学級のその他の障がい（情緒）が 7 人で特別支援学級弾力化加配により 1 組が 3・4 年生 4 人、2 組が 5 年生 3 人の 2 学級となっている。

学校教育目標は「Challenge&Thinking」。今後 10 年先、20 年先の未来を拓いていく中部小の子どもたちが、どんな状況にも柔軟に対応し、豊かな人生を生きていくために、「人生 100 年時代の社会人基礎力」として注目されている「前に踏み出す力」「チーム力」「考え抜く力」の 3 つの資質・能力を学校教育目標の重点に置いている。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

- ① 個々の自立を目指し、障がいに基づく困難を主体的に改善・克服するために必要な知識、技能、態度及び習慣を養い、心身の調和的発達の基盤を培うために少人数編制の利点を生かした自立活動を行う。
- ② 「個人推し活」総合探究学習を学年全体の計画に合わせて、テーマや目的により個人または学年との交流で探究活動を行う。その際に、学年の担任と支援学級担任が複数で見取り、支援する。

### (2) 具体的な取組み事例

- ① 学級の実態に応じた自立活動の実践  
実践例

1 組「サーキットコースを作り楽しもう」

「生き物を飼って育てよう」

2 組「ボードゲームをしよう」

「ペーパークラフトで遊ぼう」

合同「野菜を育てよう」「窓ふきをしよう」



【野菜の苗植え】

- ・心理的安定、人間関係の育成、コミュニケーションが主だが、学級の実態に応じて 6 区分 27 項目から必要な活動を行う。
- ・個に応じた支援については、個別の支援計画・個別の指導計画やその時々の実態から担任間で常に共有して進める。

児童



ペーパークラフトは 3 人の好きなものを先生がいろいろ準備してくれて、楽しく活動できた。



【ペーパークラフト】

教師



1 組では 4 人それぞれの実態に応じて、目指す姿やそのための手立てが異なるため、少人数になったことで一人ひとりに、よりきめ細かい支援がしやすかった。

## ② 複数で個を見取る「個人推し活」総合探究学習

### ねらい

学校教育目標「Challenge&Thinking」の具現化に向けて、重点を置いている3つの資質・能力の育成に向けた一実践として、学ぶことの楽しさを味わわせるとともに、自分でめあてを持って課題解決する力を育てる。

### 育成を目指す資質・能力

- ア 自ら進んで、願いや目標を持って課題に取り組むことができる。(前に踏み出す力)
- イ 類似課題を協働したり、個別の課題でも友だちの課題解決方法を参考にしたりしながら取り組むことができる。(チーム力)
- ウ 学びを活用し、問題に直面したときに自ら考え判断し行動できる。(考え抜く力)

★課題設定⇒情報収集⇒整理・分析⇒まとめ・表現の探究サイクル

### 実践例（特別支援学級）

- ・犬の種類やしつけの仕方
- ・サッカーのスキルアップ（ドリブル・シュート）
- ・自動車の車種やメーカー ・車の部品について
- ・メダカの研究（観察・飼育）
- ・プログラミング・新幹線の型調べ
- ・折り紙の達人



【メダカの卵を観察】 【研究のまとめ】

### 児童



自分の興味あることをとことん調べたり、好きなものを作ったりするのが楽しい時間だった。



もっと調べたい、うまくなりたいたいと思った時に、学年の先生が多いので得意な先生にアドバイスをもらってできた。

### 教師



特別支援学級の子どもたちは、こだわりが強く、好きなことに没頭できる個人総合はぴったり。学年で多くの目で子どもたちを見取ることができたのはよかった。

## 3 成果（○）と課題（△）

- 特別支援学級の子どもたちは特に、それぞれの特性が強く、その実態に応じて目指す姿やそのための手立てが異なるため、少人数になったことで一人ひとりに対してよりきめ細かい指導・支援ができた。子どもの自立にもつながった。
- 少人数編制で可能になった複数教員による指導・支援の利点をヒントに、地域ボランティア（前特別支援学級支援員）からの支援も子どもたちの向上につながった。
- 2組3人と同学年の5年生も少人数学級編制の弾力的加配であるため、体育や宿泊学習等、学年全体の活動でも一人ひとりの子どもをきめ細かく支援できた。
- △ 通常学級にも医療機関から ADHD の診断や薬を服用する子ども、配慮・支援を要する子どもがとても多い。さらなる支援体制を整えていきたい。



# 小学校低学年副担任制 多人数単学級の中で一人ひとりを見取る指導体制の確立 鶴岡市立藤島小学校

## 1 本校の実態

本校学区は藤島地域の中心部であり各学年複数学級を維持してきたが、近年の児童数減少により、多人数単学級となる学年が生じることが続いている。

学校規模は、全校児童数 264 名、特別支援学級 2 学級を含む全 13 学級である。2 学年以上は学年 2 学級編制であるが、現 1 学年は 35 名の多人数単学級であり、今年度 1 年生副担任として非常勤講師が 1 名配置されている。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

- ① 幼保小連携や市の就学支援との連携を図り、特別支援教育の理念に基づく個に応じた支援を行う。
- ② 入学時からのスタートプログラムを計画し、1 年生は 4～6 月を 4 時間授業とする。単位時間と教育内容を考慮し、幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続を図る。
- ③ 担任と 1 年生副担任非常勤講師との連携により、複数の目による児童の状況把握を行い、安心・安全な学校生活を保障する。
- ④ 複数の目による児童の実態把握を生かした個別支援を行うことで、確かな学力の育成や学習意欲の向上を図る。
- ⑤ 多人数単学級の教室環境を考慮し、空き教室を活用した学習環境を構築する。1 年生教室の隣に学習室を設置し、生活科等の学習活動によっては、担任と副担任が連携した見守りを行うことで、十分な学習活動の場を確保する。
- ⑥ 担任と副担任による複数の目による観察に基づき、保護者への細かな情報提供や連携を図る。
- ⑦ 教員業務支援員との連携も図り、多岐にわたる 1 年生担任業務をサポートし、担任が児童の指導に専念できるようにする。

### (2) 具体的な取組み事例

#### ① 児童の個別支援（特別支援教育への対応）

1 年生多人数単学級の場合、個別支援が必要な児童への対応を担任一人で全て行うことは難しい。今年度、副担任が配置されていることで、担任が学級全体の指導を行うと同時に副担任が個別に対応することができた。担任と副担任が役割分担をしておくことで、学級全体の活動支援と個別支援を継続的に両立することができる。

また、毎日同じ指導者が同様の対応をすることで、児童や保護者の安心感もあり、入学後から小学校生活に慣れるまでに効果的に支援することができた。

#### ② 登校時・下校時の対応（身支度・学習用具の整理・保護者からの依頼への対応）

登校時刻から 1 時間目開始までの時間帯は、登校時に配慮を要する児童への対応や、登校後の身支度や提出物の処理等、担任の業務は多岐にわたる。特に 1 年生の年度当初は、個別の対応が必要である。この時間帯に副担任からの支援が入ることで、複数の目で児童を見守り、安全・安心を確保しながら担任業務を行うことができた。登校時の遅参児童への対応、下校時の保護者引き渡しにも確実に対応できた。

### ③ 教科学習における TT 指導

教科学習においても、毎時間継続的に T・T 指導が行えることの効果は大きい。学級全員の学習状況を把握していることで、タイムリーな個別支援を行うことができる。担任が一斉指導を行っている時の個別支援では、机間指導を細やかに行うことにより一斉指導の進度に遅れがちな児童に適切に支援することができた。一斉指導後の個別の習熟確認の時間では、担任と同時進行で確認し直接指導をすることができた。1 単位時間の授業終盤で 1 年生 35 名に個別対応することは困難であるが、副担任と分担することで細かな教科指導が可能になった。

### ④ ノート点検

連絡帳や各種カードの点検は毎日の担任業務である。1 年生多人数単学級の場合児童の対応に常時追われるために、点検の時間を確保することは難しい。副担任が点検することで、担任が児童への対応を確実に行うことができた。

### ⑤ 暗唱チェック・計算カードチェック

授業時間外の休み時間等に、詩の暗唱や計算カードの習熟を個別に確認しているが、多人数でも担任と分担することで短時間での確認が可能になった。

### ⑥ 教室と学習室に分かれて行う指導

教室の隣の空き教室を 1 年生専用の学習室としている。普通教室に 1 年生 35 名の机を配置すると、それだけで教室内に空きスペースがなくなる。机間指導の通路の確保さえも不十分な状況である。生活科、図工、算数的活動、学級活動、行事のための練習等で児童の学習活動の場を確保するために、また、学習の少人数指導の場を確保するために学習室を活用している。その際に、非常勤講師である副担任が別教室で指導できることは大きな利点である。担任の指導に基づき副担任が別教室で指導することで、学習が効果的に推進し、同時に児童の安全・安心が確保できる。

### ⑦ 給食指導

1 年生多人数単学級では、給食の準備・配膳にも大きな労力と配慮が必要になる。担任一人では指導が困難である。給食準備・片付けのために、教室隣の学習室も活用し副担任と分担して準備を行うことで、効率的で安全に給食指導を行うことができた。

### ⑧ 休み時間の教室での見守り

担任は校務分掌に係る連絡対応や、授業の準備等で教室を離れなければならない時間がある。副担任が教室で児童を管理することで安全を保障することができた。

## 3 成果（○）と課題（△）

- 前述のとおり、1 年生の多人数単学級に非常勤講師としての副担任が配置されることで、学習指導・生徒指導の保障、児童管理における児童の安全・安心が保障できた。
- 指導をする担任、サポートをする副担任のように役割分担が確立することで、児童の不安に 대응することができた。児童にとって担任と副担任が心の拠り所になっている。
- △ 副担任は非常勤講師のため勤務時間が短く児童下校後にすぐに退勤しなければならない。そのために、児童下校後に担任と副担任との間で打合せの時間が取れない。児童の状況理解と指導方針の共有、学習教材準備や学習評価補助の時間を確保したい。

# 別室学習指導教員

## 生徒一人ひとりが安全安心を感じられる別室を目指して

### 米沢市立第三中学校

#### 1 本校の実態

本校は米沢市の西部地区に位置し、「自立への道」を校是に掲げ、「いのちの教育」に重点を置き、学力の充実と生徒会活動の充実に努めている。

明るく素直な生徒が多く、学校の諸行事を始め、部活動やボランティア活動にも意欲的に取り組んでいる。反面、自分をうまく表現できない生徒、基本的な生活習慣が十分身につけていない生徒もいる。近年は不登校生徒が多く、本校の大きな教育課題となっている。市の教育支援センターや民間支援団体と連携しながら「誰一人取り残すことのない令和の日本型学校教育」「生徒指導の実践上の視点『安全・安心な風土の醸成』」の具現化を目指し、日々教職員で不登校生徒への可能な支援を探っている。

#### 2 実践

##### (1) 運用の方針

- ① 別室利用生徒が安心して学習に取り組むことができるように、別室学習指導教員が別室に常駐し指導にあたる。
- ② 別室学習指導教員が別室利用生徒の様子を校務システムや日誌を活用してまとめ、管理職をはじめ全職員と情報を共有し、チームで支援にあたる。

##### (2) 具体的な取り組み事例

###### ① 安全・安心を感じられる居場所づくり

昨年度まで、教室に入ることができない生徒は、登校後に職員室で出席報告を行い、自分でスケジュールを立てて自学を中心に学習を行っていた。その時に対応できた職員は、空き時間の教員や養護教諭が中心であった。今年度は、基本的に別室学習指導教員が別室に常駐し、登校してきた生徒を待ち受けるようにした。生徒と対話し、思いを汲み取りながら一日のスケジュールを立てることが可能となり、生徒の安心感が高まり、継続的な登校につながった。この継続的な登校により学習の定着が図られ、通常の授業の進度に追いつき、部分的な参加ではあるが学級での授業に取り組めた生徒もいた。さらに、学校生活全般に長期的な見通しを持ち、目標設定を行うことが可能となったため、生徒会行事等へ本人なりに参加することにつながり、自信や充実感、在籍する学級への所属感を持つ好循環も生まれた。

また、年度当初に別室学習指導教員と養護教諭、教育相談担当が話し合い、多くの職員が少しでも生徒と交流が持てるようにすること」「学習に取り組んでいる生徒が職員に質問しやすいようにすること」「希望に応じてオンラインで教室の授業を受けられるようにすること（昨年度までの教室はWi-Fi環境が未整備）」の3つが可能になるように職員室に一番近い教室を別室とした。このことにより、別室を利用している生徒が学習プリントを携え職員室に行き質問したり、空き時間の教員が別室に行き学習指導をしたりする姿が多く見られるようになった。別室学習指導教員が、コーディネーターの役割を担い、担任、教科担当と情報共有を図ったことによるものが大きいと考える。

その他、別室学習指導教員がいるおかげで、これまで以上に別室を利用している生徒の安心・安全を確保することができた。例えば、「隣の教室棟の廊下から見られ

ているようで…」と不安を口にした生徒の声を聞き、翌日までには別の教室からブラインドを移設したり、生徒がいない間に机の配置等が変わっていることに対する別室登校している生徒への不安感に気づき、他の生徒の活動や教職員の会議に別室を利用しないようにしたりした。別室を利用している生徒が「気になる」「不安を感じる」ことについてはできる限りの配慮を行うことを全職員で確認した。

## ② チームで別室生徒を育てる

別室学習指導教員は、別室に登校した生徒のその日の様子について校務支援ソフトや日誌を利用し、全職員が情報共有できるように記録を作成した。別室学習指導教員の勤務が15時までとなっていることや、生徒が別室を利用する時間はほぼ別室学習指導教員が別室に常駐していることにより、放課後や空き時間に会議や打合せが出来ず、生徒についての情報共有が課題であった。別室学習指導教員が別室で過ごす生徒の細かな見取りを行い、校務システムの生徒の様子を記録するツールや日誌にまとめることにより、会議や情報共有の時間が持てない課題を埋め、生徒の適切な支援をチームで行えるようにした。

また、養護教諭が日常から別室に足を運び、別室学習指導教員と情報共有を図り、記録だけでは伝わりにくい生徒の様子を把握し、担任や学年主任に伝え、適切な支援を行えるようにするなど、別室学習指導教員とともにコーディネーターの役割を担った。別室学習指導教員や養護教諭は「〇〇さんが今登校しましたよ」と担任や所属学年の職員に声をかけ、生徒と担任、学年職員が顔を合わせられるようにした。職員室の座席についても養護教諭と別室学習指導教員の机を隣接させ、細かな時間でも情報共有し、生徒にとって必要な支援を検討し、全職員に伝えていくかを協議できるようにした。

## ③ 市の教育支援センターとの連携を密にする

別室利用生徒の中には、市の教育支援センターにも通っている生徒がいる。多くの生徒は様々な原因から不登校となり、学校に復帰するまでの間、市の教育センターに通っている生徒である。この生徒が安心して学校復帰を果たせるように、別室学習指導教員がこまめに市の教育支援センターの指導員と連絡を取り合い、生徒が抱えている課題や必要な支援の共有を図った。市の指導員が生徒と一週間のスケジュールを立てる中で、生徒が学校生活に対して不安を抱えている内容を別室学習指導教員に連絡したり、学校での支援体制を伝えたりするなど、生徒の登校復帰に向けた不安解消を図った。軌道に乗ってからも、市の教育支援センターと同じ方向性で支援できるように定期的に連携を図っている。

## 3 成果（○）と課題（△）

- 別室学習指導教員が別室に常駐し担任のような役割を果たすことは、生徒の安心感、学習や学校生活への意欲につながり、不登校から学校復帰できた生徒が増えた。
- マンパワーの不足や職務の多忙の中、別室学習指導教員の生徒の細かな見取りを全職員で共有したことで、生徒が抱える課題や不安に適切な支援を行うことができた。
- △ 様々な学びの保障が叫ばれる中ではあるが、別室の環境充実が進むことで生徒の在籍する学級復帰への意欲の高まりが課題となっている。



# 教科担任マイスター制度 小学校教科担任マイスター 外国語教育の充実と令和の日本型教育の実現に向けた実践 天童市立津山小学校

## 1 本校の実態

本校は、児童数 96 名、8 学級（特別支援学級 2）の小規模校である。学校教育目標「他と協働し、自らくらしを創造する子供を育成する」の具現化のために、6 年間の教育課程で育みたい資質・能力を明らかにし、目指す子どもの姿を「ちょうせん（自ら学びを創る子供）」「つながり（つながりを大切にし共に伸びる子供）」「思いやり（健康でたくましくしなやかに生きる子供）」として、全職員が協働的に教育活動を行っている。

教科担任マイスター制度は、3 年目である。今年度は、外国語の教科担任制を推進することを目的に取り組んできた。これまでも、第 3 学年以上の担任が創意工夫し授業を行ったり、週 1 回の A L T との T. T による学習を行ったりしてきたが、系統性のある指導や学習の積み上げなど授業構想において課題が見られた。

また、令和の日本型教育の実現に向けて、個別最適な学びと協働的な学びの一体的な充実を図るために、子どもの主体的な学びを促す授業実践についても、深い教材研究に基づく授業づくり、子どもの自主的な学びを促す環境づくりなどにおいて課題がある。

外国語における教科担任制推進のためのコーディネート、令和の日本型教育の実現に向けた学習スタイルの構築など、本校の学校教育目標の具現化を目指して、教科担任マイスター制度を活用している。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

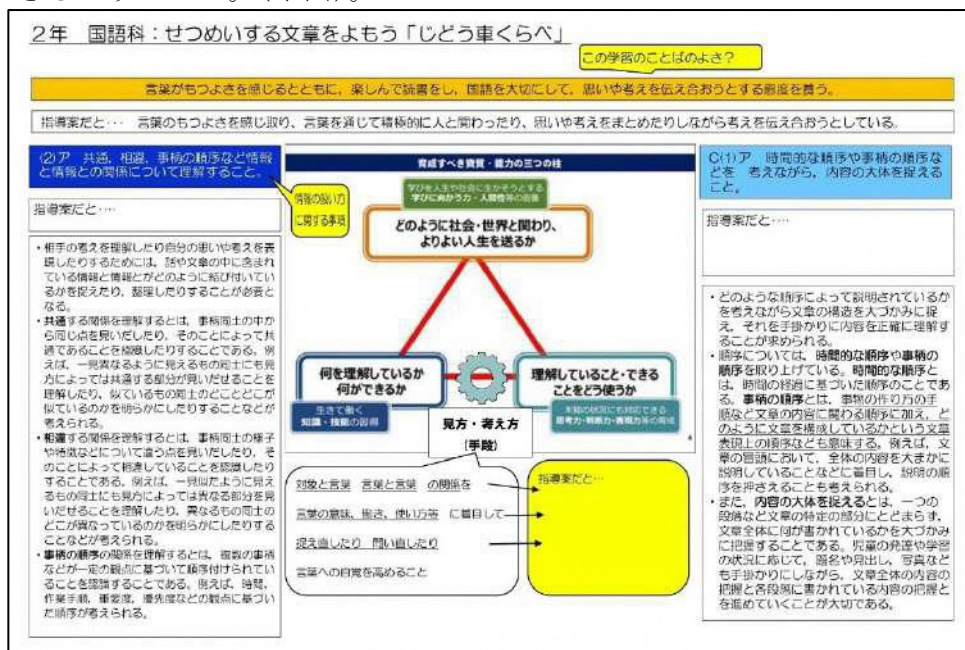
- ① 6 年担任が教科担任として 5・6 年の外国語の授業を担当し、必要感のある課題の提示や系統性を踏まえた授業づくりを行うことで、外国語教育の充実を図っていく。また、外国語の授業を自ら公開したり、他の担任の授業に助言を行ったりすることで、O J T の実効性を高めていく。
- ② 教科担任マイスターは、教務主任が行い、打合せの時間の確保や時間割の調整などを行うことで、担任、教科担任、研究主任等と連携しながら、令和の日本型教育の実現に向けた学習スタイルの構築を目指していく。

### (2) 具体的な取り組み事例

- ① 系統性を踏まえた外国語の授業実践
  - ・教科担任マイスターは、教科担任が 5・6 年の外国語の系統性やこれまでの子どもの学びを整理し、深い内容研究に基づいた授業を日常的に行うことができるように体制を整えた。
  - ・5 年「A L T と天童市のおすすめスポットへレッツゴー」、6 年「A L T に自分のおすすめの料理を紹介しよう」などの単元では、教科担任と連携して 2 学年を関連付けて教材研究を行った。また、7 月の「山形大学工学部の留学生との交流学习」では、5・6 年合同で班を編成し、日本語がほとんど分からない 7 名の留学生に学校案内をする実践を行い、子どもが外国語について主体的に学びを深められるような場を意図的に設定した。
  - ・山形大学附属小学校と教材研究や事後研究会を行ったり、教科担任が山形大学附属小学校の研究授業のコメンテーターを務めたりするなど、連携を図りながら外国語の授業の充実を図るようにした。

② 令和の日本型教育の実現に向けた様々な学習スタイルを用いた授業実践

- ・教科担任や担任等が、共に授業づくりや教材研究ができるように、共通の空き時間をつくり時間割を調整した。また、様々な授業で担任外の協力が得られるように人的体制を整えた。
- ・教科担任マイスターと研究主任は、単元づくりのスタートから担任と授業づくりを行った。その際、学習指導要領に示された教科の目標をしっかりと押さえ、単元で子どもに育成すべき資質・能力や教科としての見方・考え方を明確にして、単元を構想できるようにした。(下図)。



- ・教科担任マイスターが、基礎基本の知識・技能において定着率が低い4年算数「整数の除法」や5年算数「異分母の分数の加法、減法」において、本単元や前学年の学び直しができるよう教材を作成し、授業を行った。
- ・単元内自由進度学習として、昨年度作成した教材・教具などを基に、新たな単元の環境づくりをしたり、修正してよりよい教材にバージョンアップしたりして、子どもの自主的な学びが促されるように単元内自由進度を実践した。
- ・子どもが進める授業として、6年社会科の学習について、他教員の参考となるように授業公開の機会を設定した。本時だけでなく、先生役となった子どもが教材研究や模擬授業をしている様子も参観するなどし、子どもが進める授業について継続的に教職員間で共有できるようにした。

3 成果 (○) と課題 (△)

- 外国語の充実に向けた教科担任制を導入することで、教科の専門性が高まり、教師も子どもも主体的に学び、学力を高めることができた。
- 研究授業だけでなく、日々の授業でも学習指導要領を踏まえた教科の深い内容研究に基づいた単元構想を行うことで、子どもの資質・能力の育成を図ることができた。また、教科の目標を踏まえた上で教科横断的に授業を行うなど、担任のカリキュラム・マネジメント力も向上した。
- 教科担任マイスターは、外国語だけでなく他教科でも助言したり、共同して環境を整えたり、学習スタイルを提案したりすることができた。
- △教科担任制の取組をさらに持続していけるようなシステムや環境を整えることが課題である。

# 教科担任マイスター制度 小学校教科担任マイスター 教科担任制の推進と日常のOJTの活性化 新庄市立日新小学校

## 1 本校の実態

本校は、児童数 503 名、25 学級（特別支援学級 7 学級を含む）、教職員数 51 名の最上地域における大規模校である。学校教育目標「自律・尊重・志」のもと、「支え合いながら、学びを深める児童生徒の育成 ～学びの空間づくりを通して～」を校内研究主題として、「児童が疑問をもち、夢中になって学び続ける姿」を目指した授業づくり、授業改善を核とした日々の教育活動にあたっている。

教育活動の充実、毎日の授業の質の向上を意味するものであり、そのためには、深い教材研究のための物理的な時間の確保が必要不可欠である。また、教員間の年齢差が大きい中で、経験年数の浅い教員の数が年々増え続けており、自らの指導に自信を持てなかったり、一人で悩みを抱え込んでしまったりする者も少なくないことから、日常的なOJTの活性化も急務である。

本校には、豊かな経験や多彩な専門性を持つ多くの教員が在籍している。そのような大規模校だからこそ、個々の力量に任せるのではなく、そのスケール・メリットを最大限に生かして「チーム（組織）」として諸課題に向き合い、共に高め合っていくことで、日々の教育活動をさらに充実したものになるよう、本主題を設定し、以下のような実践を積み重ねてきた。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

- ① 教科担任マイスターが中心となって、校内の教科担任制を積極的に推進する。指導する教科数を削減・焦点化することで、授業づくりの基盤である教材研究の時間を従来以上に確保するとともに、より専門性を生かした指導によって、学習に対する児童の興味・関心や学習意欲を育むことができるようにする。
- ② 教科担任制による学年・学級経営の特色を生かし、学年「チーム」としての体制づくりとOJTの日常化を図る。各学級に担任団を始め、複数の教員が関わり、協働的に指導・支援等を行うことで、児童と教師、教師と教師の間の多様なつながりを醸成するとともに、日常的できめ細かなOJTが実現できるようにする。
- ③ 教科担任マイスターと研究主任が密に連携しながら、校内研修や日々の授業づくりの質の向上を図る。授業研究を、個々の授業者ではなく、チームとして（組織的に）取り組んでいくことで、共通の課題意識や教材理解のもとでさらに質の高い授業を児童に還元できるようにする。

### (2) 具体的な取り組み事例

#### ① ダイナミックな「教科担任制」の推進

本校は各学年 3 学級、3 人の担任教師をもって構成されている。そのような特色を生かし、各々が 3 学級分の複数の教科指導を受け持つ「教科担任制」を実施した（図 1）。

学級	国語	社会	算数	理科	音楽	図工	家庭	体育	道徳	総合	外国語
5-1 担任A	A							F	A	A	
5-2 担任B	B	B	A	D	E	B	C	B	C	B	C
5-3 担任C	C							B	C	C	

D：専科教員    E：OJT支援員    F：教務

図 1 「教科担任制」による各教科の指導者（第 5 学年を例として）

また、OJT支援員を教科指導者として活用したり、その他の専科教員や教務主任等の担任外の教員による指導も組み合わせたりした結果、担任1人あたりの指導教科数は右の例のようになった（図2）。

指導教科数を従来に比べて大幅に削減したことで、それぞれの教員が持つ専門性や強みをより生かした指導が可能になった。また、指導教科が絞られたことで、1つの教科あたりの教材研究にかける時間が確保されるだけでなく、より深く充実した研究や授業準備も可能になり、毎日の授業の質の向上につながった。



図2 担任1人あたりの指導教科数の変化

## ② OJTの日常化

上記①の取組みは、授業の質の向上の他に、教師個人ではなく学年「チーム」として学年・学級経営にあたることや、OJTをさらに日常的・普遍的なものとして根付かせることを意図したものである。「1人で自分の学級をみる」のではなく、「3人で3学級をみる」意識や考え方を日々共有してきた。実際に、各担任は毎日のように3学級の児童と触れ合い、3学級の経営に関与することになる。経験年数、専門性、強み（弱み）も異なる3人だからこそ連携することで、組織的かつ柔軟に学習指導や生徒指導にあたることができた。何事に対しても、学級の枠を超えて、経験年数の浅い若手教員を含む学年団3人で「共に」そして「自分事」として、目の前の課題に向かい、思いや考えを伝え合い、実践し、喜びを分かち合ったり新たな課題を見出したりしてきた。このように、多様な教員と常に「つながっている」環境の中で、「チーム」として試行錯誤しながら自己研磨した日常こそが、効果的なOJTとして価値付けられるのではないか。

## ③ 校内研修との連携 ～「ゼロベース」の授業づくり研究会～

「0（ゼロ）から1（イチ）を」、「みんなで授業づくりを」等々を合言葉に、指導案等の事前準備を必要としない「ゼロベース」の授業づくり研究会を、校内研修と連携しながら促進してきた。「0（白紙の状態）」だからこそ、経験の有無や専門性に関係なく、自由闊達に疑問やアイデアを出し合ったり教材を持ち寄ったりすることができ、児童の興味・関心や意欲を高める授業づくりが進んでいった。また、後日完成した指導案をもとに、参加した教師各々が実際に授業を行い、相互に参観することで、児童や教師の様子を丁寧に省察し、よさを認め合い、自らの指導へと生かすことができた。この積み重ねが、「チーム」としての校内研修の活性化や授業力の向上、そしてOJTへと結びついていった。



写真1 放課後の授業づくり研究会の様子

## 3 成果（○）と課題（△）

- 「教科担任制」のよさや手応えを、実践した教員一人ひとりが実感している。授業の質の高まりにも確実に寄与してきた。
- 「チーム（組織）」として、支持的な教師間のつながりや関係性の中で、学年・学級経営や校内研修の充実化、OJTの日常化を図ることができた。
- △ 「教科担任制」の推進に対する不安感を持つ担任もいる。成果を積極的に発信・共有する一方で、それらの声を丁寧に扱い、より効果的な手立てを探っていく。



# 教科担任マイスター制度 中学校教科担任マイスター 確かな学力を育成するための教科担任マイスターを核とした 授業改善の取組み

飯豊町立飯豊中学校

## 1 本校の実態

本校は全校生徒 153 名、特別支援学級 2 学級を含む 8 学級の中学校である。

学校教育目標

- ・自ら考え、判断、表現し、主体的に学ぶ力を身につけた生徒
- ・自尊感情と社会性を身につけ、郷土を愛し、地域に貢献する生徒
- ・「いのち」をつなぎ、自ら体力を高め、たくましく生きる生徒
- ・「グローバル」の視点を持ち、SDG s を生活の一部にできる生徒

のもと、「自ら考え、表現、判断し、主体的に学ぶ力を身につけようとする生徒の育成」を学校研究主題として、日々の実践を積み上げている。

本校の実態として、数学科において個々の苦手意識や学力差が大きいこと、また、粘り強く考えず指示待ちの生徒が多いことが挙げられる。教科担任マイスターが数学科をタテ持ちとし、複数の数学科教師の配置により T・T や少人数指導を生徒の実態に応じて柔軟に取り入れ、教師主導の授業から生徒同士が互いに関わり学び合う授業、学習課題を自分事として主体的に取り組む授業を目指し教科担任マイスター制度を活用している。また、教科担任マイスターが研究主任を兼ねることで、校内全体の授業力向上、生徒の学力向上につなげている。

## 2 実践

### (1) 運用の方針

- ① 教科担任マイスター（数学科）がタテ持ちし、系統性を意識した主体的・対話的な授業を行うことで、他の教員の指導力の向上、生徒の学力の育成を図っていく。
- ② 教科担任マイスターが研究主任を兼ね研究をリードすることで、研究主題の実現に向けた取組みを推進する。
- ③ 飯豊町の重点教育である小中連携を出前授業や集合学習等を通し推進する。また、小学校教員との授業構想の共有し、9 年間を見据えた算数・数学の学力向上を目指す。

### (2) 具体的な取組みの事例

#### ① 数学科を出発点とした授業改善

タテ持ちでの授業により、生徒が 1 年生から 3 年生にかけて身に付けるべき資質・能力を系統的に指導できることにつながった。また、単元のはじめにゴールを示した後に個別最適な学びと協働的な学びを実現する「単元内自由進度学習」に取り組んだ。目的意識を持って自力解決する姿、ゆるやかな教え合いや話し合いの姿が自然発生的に起こり、達成感を生徒自身が感じるようになっていた。また、自ら計画を立て、責任をもって学習を進めることで、主体的な学びの姿勢が継続できていた。

1 回目の校内授業研究会で、教科担任マイスターが授業提供を行った。単元内自由進度学習を他の教員に示すことは、生徒の学習効果を高めるだけでなく、教員の



# “教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント

## 村山教育事務所

### 1 はじめに

村山管内の各学校では、“教育山形「さんさん」プラン”を生かしたきめ細かな指導を基盤とした授業づくりが行われ、一人ひとりの確かな学力の育成を目指した授業改善が推進されている。

本事務所では、教科のねらいを達成し、子どもが確かな学力を獲得するために、リーフレットや授業改善チェックシート（下記参照）を作成した。「教科の本質に迫る単元、題材構想」「自ら学びを調整する振り返りの充実」「ICTを活用した学びの環境整備」「指導と評価の一体化による指導方法の工夫・改善」の4つのポイントで授業改善を示すとともに、生徒指導の実践上の視点を授業の中で意識し、授業において発達支持的生徒指導を行う「学習指導と生徒指導の一体化」について助言することで、日常の授業の中で「学習指導と生徒指導の一体化」の重要性を意識し、よりよい人間関係の構築に努めることができるよう改善を図った。

**令和6年度「自立した学習者」を育成するための授業改善チェックシート** 村山教育事務所指導課

全ての子どもが確かな学力を獲得し、生涯にわたって学び続ける自立した学習者になるために、私たちの児童生徒観・教育観を転換し、一人一人の子どもも主眼とした授業改善を行うことが求められています。「個別最適な学び」と「協働的な学び」の観点から学習活動の充実の方向性について改めて捉え直し、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた授業改善を進めていく上で、学習指導に「生徒指導の実践上の視点」を生かすことが不可欠です。

**自立した学習者になる**

確かな学力を獲得する  
基礎学力・思考力・表現力・読解力・学習力・読解力・読解力・読解力

**主体的・対話的で深い学び**

教科の本質に迫る単元、題材構想

- 子どもが各教科等の特質に応じた見方・考え方を働かせ、深い学びに至る学びの過程を想定した単元や題材を構想する。
- 子どもが、対話によって自分の考えを広げたり深めたりする場面を設定する。

自ら学びを調整する振り返りの充実

- 子どもが自分に合った学習の進め方を考える振り返りの機会を充実させる。
- 子どもが学び直しや発展的な学習を行うことができる教材や学習方法等の柔軟な提供や設定を行う。

自己決定の権の保障

学習において自ら考え、選択し、決定する、発表する、制作する等を体験する。

協働的な学びと協働的な学びの一体的充実

**ICTを活用した学びの環境整備**

- 子どもが学習の発達を促したり、自分に合った多様な方法で学習を進めたりする機能を整える。
- 子どもが、縦横・時間的・空間的制約を超えた多様な他者と協働する環境を整える。

**指導と評価の一体化による指導方法の工夫・改善**

- 子どもがつまづきを克服し、資質・能力を獲得した具体的な姿を想定した評価規準を設定し、適切な支援を行う。
- 子どもが、単元を通して獲得を目指す資質・能力を自覚し、学習に取り組むことのできる評価を行う。

**協働的な人間関係の育成**

自他の特性を尊重し、相手の立場に立って考え行動できる

**安全・安心な学習の環境**

一人一人が、積極的に存在して尊重され安全かつ安心して教育を受けられる

### 2 村山管内における実践から

学習指導要領及び第6次山形県教育振興計画、“教育山形「さんさん」プラン”を踏まえた確かな学力の育成に向けて、学習指導等の課題の解決を図る実践的な研修会として教育事務所研修を実施し、教員の指導力の向上を目指した。

#### (1) 第1回学習指導力向上研修会（兼）村山地区協議会の実施

「生徒指導提要が示すこれからの生徒指導

～学習指導と生徒指導の一体化を中心に～」（講義・演習）

各学校における学習指導や生徒指導の中核を担う先生方を対象とし、確かな学力と自己指導能力の育成に向けて指導力の向上を図ることをねらいとして研修会を実施した。

「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していく上で、学習指導に「生徒指導の実践上の視点」を生かすことの大切さを理解するとともに、その具体的な授

業づくりについて研修を深めた。生徒指導を意識した授業をつくるには、必ずしも新たな実践や特別な手立てを行うわけではなく、日々の授業や学級経営で「当たり前」にしている工夫・配慮を生徒指導の視点で捉え直すことが大切であることを実感できた。学習活動を「生徒指導の視点」で捉え、意図的に組み込むことで、指導者の言動や姿勢が変わり、日々の授業が変わっていくことを考える機会となった。

## (2) 第2回学習指導力向上研修会（兼）幼保小中接続推進研修の実施

「幼児期における子どもの育ちを生かす育の在り方」（講義）

「幼児期の自発的な遊びから、学びへつなぐ

～子どものやりたいが生まれる環境を目指して～」（実践発表）

幼稚園、認定こども園、保育所の幼児教育に関わる先生方や小・中学校、特別支援学校の先生方を対象とし、幼児教育で重視されている「一人ひとりに応じた指導」や「環境を通して行う教育」の意義を再確認し、幼保小中における育ちや学びの一貫性・連続性について理解を深めることをねらいとして研修会を実施した。

幼児期における子どもの育ちや学びを小学校以降の教育へとつなげるための具体的な方法について、幼児教育施設での実践の発表や小学校での生活科・教科の学習など様々な事例を通して学びを深めた。架け橋期の子どもについて、自ら学び、考え、行動する主体的な存在であるという子ども観・教育観に立ち、「見ればわかる」と「見ただけではわからない」子どもの表現を推量しながら子どもを捉えることが、一人ひとりの多様性を理解し、子どもの育ちや学びにつながることを考える機会となった。

## (3) 第3回学習指導力向上研修会（学校経営指導訪問支援型の一環）

「主体的に学びを創る子どもの育成

～「個別最適な学び」と「協働的な学び」の一体的な充実～」（講義）

本研修会では、「個別最適な学び」と「協働的な学び」を一体的に充実していく学校の主体的な研究の取組みを公開していただき、村山管内の小・中学校に学びを広める場とした。国語・算数・総合的な学習の時間・特別支援の4つの部会を公開し、子どもの主体的に学習に取り組む力を引き出したり、深めたりするための教師の指導や支援について学びを深めた。支援型の小学校の先生方からは、「学校研究に沿って指導主事が関わることで、主体的に学びを創る子どものイメージを具体的に持つことができた。」「教科部会で、教科の本質に迫る系統性のある授業づくりを行うことで、教師の主体性が高まり、一人ひとりの子どもを主語にする授業につながった。」などの感想があった。子どもの個性や学び方の深い理解に基づいた、教科の本質を捉えた教材研究を重ねることこそが自立した学習者を育成する上で不可欠であることを再認識する機会となった。研修を実施するにあたっては、継続的に学校の研究に関わることで、先生方ともに学びを深める好機となった。これからも先生方の授業づくりに寄り添いながら、伴走者として学校の研究を支援していく。

## 3 おわりに

「各学校で育成を目指す資質・能力」を明確にし、全教職員の共通理解のもと、日常的に授業改善に取り組んでいる学校が増えている。各教科等の指導と生徒指導を一体化させた授業づくりについて周知していくことを通して、一人ひとりの子どもを主語にする教育活動を推進し、本プランの目指す「わかる授業」「いじめや不登校のない楽しい学校」の実現を目指していきたい。

# “教育山形「さんさん」プラン”を生かした授業改善のポイント 最上教育事務所

## 1 はじめに

本地区では、以前から協働的な学びに視点をおいた授業づくりを行う学校が多く、主体的・対話的で深い学びが推進されている。“教育山形「さんさん」プラン“による少人数の利点を生かし、一人ひとりの考えを大切にしながらペアやグループ学習における対話を通じた児童生徒主体の深い学びを目指す授業づくりが進められている。

また、最上教育事務所としてチームで授業を作り上げる「もがみ授業づくり研修『チームMOGAMI』」や、「学習指導力向上研修会」「授業改善へのアクション」等を通じて、各学校における授業づくりを支援している。

## 2 最上管内の実践から

### (1) もがみ授業づくり研修「チームMOGAMI」

最上地区は児童生徒数の減少が著しく進んでおり、どの市町村においても学校規模が小さくなっている現状がある。そのため、1学年1学級という学校や校内に教科担当教員が1人しかいない学校も増えている状況にある。小規模校では、授業実践や授業の悩みを相談する機会が少なくなっており、校内OJTに課題が見受けられる。そのような状況を打破し、先生方が自信を持って授業をしていくために、「チームMOGAMI」という授業づくり研修を行っている。

「チームMOGAMI」は、3名の先生を1グループとして、グループで相談しながら単元計画から評価までの授業づくりを行う研修である。校内研究では、本時の授業がメインになることが多いが、習得、活用、探究のバランスの取れた単元づくりを中心に検討を重ねることで、教員の学習指導力の向上を目指している。普段は同じ学年・教科の先生と一つの単元についてじっくり話し合う機会が少ないので、大変勉強になるとメンバーからは好評である。

今年度は、小学校国語、中学校理科の2部会を開催し、3回の研修と授業実践の研修を行った。

#### ① 小学校国語

授業実践：戸沢村立戸沢学園 第6学年 国語

単元名：「おすすめパンフレットを作ろう」

助言者：最上教育事務所指導主事 今坂 里美

#### ② 中学校理科

公開授業：新庄市立八向中学校 第2学年 理科

単元名：「電流と磁界」

講師：山形大学名誉教授 中井 義時 氏

参加したメンバーからは、「チームで単元計画をつくることで、今までの自分にはない視点を取り入れることができました。他の先生方と情報を共有できたことは、貴重な経験で非常に勉強になることが多かったです」という感想があり、実践を通じて成果を感じている様子を伺うことができた。また、授業研究会の参加者からも講師の先生の講話内容も含めて、今後の授業改善につながる研修になったとの評価を受けた。

### (2) 学習指導力向上研修会

全国学力・学習状況調査の結果を授業改善に生かしていくために、学習指導力向上研修会を開催している。今年度の学習指導力向上研修会では、各学校の研究主任の先生方中心に参加いただいた。



また、研修会では、全国学力・学習状況調査の分析説明を行った後、授業改善の課題の一つである「学習評価」について、山形大学教職大学院 准教授 鈴木貴子氏を講師に迎え、「全国学調の問題から授業づくりを考える」をテーマに講義と演習を行っていただいた。講義・演習を通じて

- ・ **目指す姿を子どもと共有**することで子どもたちが力を発揮しやすくなる
- ・ ゴールの姿を具体的に描き、「**逆向き設定**」で授業を考える
- ・ **OUTPUT**（アウトプット）と **FEEDBACK**（フィードバック）を大切に

などの指導と助言をいただいた。

先生方からは、「確実に力を付ける授業づくりのためのポイントとなる点について、具体的に学ぶことができました」「実際の単元構想や授業づくり、教材研究のイメージを持つことができました」等の好意的な感想が多かった。

### (3) 授業改善へのアクション

地区全体の全国学力・学習状況調査の結果を分析し、授業改善に向けて地区全体で共通に取り組むべきポイントを3点示した。（下図参照）

授業改善へのアクションについては、参加した研究主任の先生方が、学校で全教職員に伝達するようにしている。また、学校訪問等の全体指導や授業後の協議の場などで、事務所の指導主事が授業改善へのアクションの視点を踏まえた助言指導を行っている。各校において、どの視点を重視していくか明確にするようお願いをし、授業改善に活用いただいている。

**R6 授業改善へのアクション(地区としての取り組み)**

**教科の本質を捉えた基礎・基本の確実な「習得」を目指した授業づくりの日常実践**

- ①各教科・単元において「習得」場面でおさえたい基礎・基本事項を明確にする。
- ②教科特性を踏まえた「見方・考え方」を働かせ、個の学びを保障しながら協働的な学びにおける対話の質を高める学習活動を仕組む。
- ③本時の学びを見童生徒が振り返り、学びを家庭学習につなげ、家庭学習での学びを授業に生かす。

**教科におけるつけたい資質・能力を明確にした適切な評価の実施**

- ①教科においてつけたい資質・能力を明確にした単元を構成する。
- ②具体的な評価規準を作成し、見童生徒と共有する。
- ③本時における子どもの学びを評価するための評価問題・活動を必ず実施し、見童生徒の学習改善・教師の指導改善に生かす。

**見童生徒質問紙と学校質問紙の分析を行い、校内研究のレベルアップにつなげる**

- ①見童生徒質問紙と学校質問紙の回答状況や相違点等について校内で共有し、改善、検証を継続して行う。
- ②日常の授業改善や定期的なアクションプランの見直しを行い、C(チェック)A(アクション)の充実を図る。
- ③目標達成に向けた、必然性のあるICTの活用を行う。

### 3 おわりに

「主体的・対話的で深い学び」を実現するには、「さんさん」プランを活用し、指導と評価の一体的推進が重要である。授業改善を通じたよりよい授業づくりについて、今後も先生方を支えていきたい。

# “教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント 子ども主体の授業づくりに、教師も探究心を持って挑戦！

置賜教育事務所

## 1 はじめに

管内の学校では、「さんさん」プランのよさを生かし、確かな児童生徒理解に基づく子ども主体の授業づくりを目指して、様々なアプローチで授業改善が進められている。これは、「おきたまの教育」で掲げている「子どもも大人も、ともに学び合える喜びを感じるような一日、一日をつくる～誰一人取り残さない教育の実現～」につながるものである。子どもたちは誰もがわかるようになりたい、成長したいという前向きなエネルギーを持っている。そのような子どもたちの力を信じ、授業の中でも誤答を大切にしたり、一人ひとりのよさや変容を価値付けたりする教師の日常的な関わりが多く見られる。

## 2 置賜管内における実践から

### (1) 誰一人取り残さない授業づくりプロジェクト

#### ① 各教科ならではの学びを深めるアプローチ

小・中学校教員の合同チームと指導主事が、「子どもの実態や発達段階に即して、誰一人取り残さず、子ども一人ひとりに自ら学びをつくっていく力を育む授業づくり」に取り組み、3年目を迎えた。1・2年目は、教師が一斉に教える授業から、子どもがやってみたいという思いを持続させながら自らが主体的に学ぶ授業へと教師の授業観を転換し、新たな単元開発を行い、公開授業研究会でその成果を提案してきた。今年度はさらに、子どもが教科の見方・考え方を働かせ、単元ごとに学んだことや自らが獲得した学びのサイクルを次の学びへと活かしていくような授業づくりを目指した。算数と社会の実践事例を以下に示す。



#### <小学5年:算数>

単元名「角柱と円柱」



「多様な考えを生かしたい図形の単元でも単元内自由進度学習は可能かどうか」

【目指す子どもの姿】

- \*自らの学びを客観的に捉え、自己調整
- \*見方・考え方を働かせて、獲得した数学的な表現を使って説明することができる。
- \*教科書やICTを自由に使うことができる。

#### <小学4年:社会>

単元名「きょう土を開いた人」



【目指す子どもの姿】「問題解決的な学習サイクルを自ら回し続け、学びを深める姿」

【重視したこと】

- \*児童主体の必要感のある学習計画づくり
- \*見方・考え方を働かせて資料を読み取り資料をもとに考える学び方を身に付ける。(ICT・副読本活用)
- \*自己評価と振り返り

#### ② 確かな見取りと教師の指導性の大切さを実感

「一人ひとりの学びを見取ることは難しいが、教師の見取りの質を高め、見取りを次の支援に生かすことで子どもはどんどん自分で課題解決に挑んでいくようになる」、  
「これまで、本時で全員にここまで到達させなければならないという思いが強かったが、単元で付きたい力に向かって、本時ではその子がどのように学んでいたか、それならば次時にどのような支援が必要かを考えるようになった」これらは、授業者や参観者から寄せられた声である。本プロジェクトで目指している子ども主体の授業は、決して子どもに任せっぱなしの授業ではない。「主体的・対話的で深い学び」を実現さ

せるためには、教師が単元で育成すべき資質・能力を明確にすることは勿論であるが、その子の学びのストーリーに着目しながら、単元の目標に照らして意図的な支援や学びの環境づくりを行うことが不可欠であることに、改めて気付くことができた。

## (2) 校内研究を中核として、チーム学校で取り組む授業改善

### ① 教育事務所主催の資質・能力向上研究協議会（5月・1月）

標記研修会では、「実行性のあるアクションプランについて」説明し、校内研究のさらなる充実に向けて参加者同士が悩みや課題について対話する時間を設けた。研究主任や教科担任マイスターを中心として、子どもが学び方や学習計画を自己選択・自己決定しながらいきいきと学ぶ授業に挑戦している学校も増えている。



### ② 子どもの学びと教師の学びは相似形

研究主任同士の対話で話題になったことは「事後研究会」の持ち方である。管内の学校では、着目する児童生徒を決めて1時間を通して学びの様子を記録したり、タブレットで撮影したりして、子どもの事実に基づく協議が行われている。また、協議後にリフレクションの時間を設け、参加者全員が自分の授業に生かしていきたいことをタブレットに蓄積している学校もある。そのような学校では、校内研究で先生方がつながっている風土を感じる。



## (3) 夢や目標の実現に向けて、子どもが安心して学ぶことができる学級づくり

一斉授業においては、人と比べて自信をなくしたり、できない自分を責めたりして、粘り強く考えることをあきらめている子どもたちがいるのではないだろうか。教育活動のあらゆる場面で、その子自身の持ち味を發揮して自己の成長を実感できる場や、キャリア教育を柱として自分のよさや可能性を認識しながら生き方を考えたり、学ぶことの意義を実感したりできる場を設けることで、子どもが自分らしく学びに向かう姿を目指したい。そこで、今年度も「特別活動」に焦点をあてた研修会を実施した。

① 地区いじめ・不登校防止連絡協議会    ② 教育事務所における5年経験者研修  
 ・演題「語り、語らせ、語り合わせる、キャリア・カウンセリング」講師：長田徹教授  
 ・演題「楽しく豊かな学級・学校生活をつくる特別活動」講師：杉田洋教授

日常の授業の中でも「生徒指導の実践上の4つの視点」を意識し、学習指導と生徒指導の一体的な充実を図っていくことの大切さを実感する時間となった。

## 3 おわりに

今年度も、「子どもが自ら学びをつくっていく姿とは？」という問いを持ち、先生方が主体的に授業改善に挑戦する姿が見られた。根底には、子どもたちの成長を願い、その子の可能性を伸ばしてあげたい、予測困難な未来を幸せに生きていくことができるようにしたいというあたたかい思いがある。今後も、さんさんプランを基盤として、「学校が楽しい、みんなで学ぶことが楽しい」と思える授業を子どもと共につくっていききたい。



# “教育山形「さんさん」プラン”を基盤とした授業改善のポイント

庄内教育事務所

## 1 はじめに

庄内教育事務所管内では、各学校において児童生徒の確かな学力の育成を目指し、“教育山形「さんさん」プラン”を生かしたきめ細かな指導を基盤とした授業づくりに取り組んでいる。

各学校への指導・助言の際には、庄内指導主事会で作成している授業づくりワンペーパーを活用し、目指す方向を同じにして授業改善を進めている。

年度末には、ワンペーパーの項目と「生徒指導の実践上の視点を生かした授業づくり」について、庄内指導主事会の全指導主事で評価を行い、管内の授業改善の現状を把握し、次年度の支援につながるよう共通理解を図った。

## 2 庄内管内における実践から

### (1) 学習指導力・特別支援教育力向上に向けた学校サポート訪問の実施

学力向上支援チームによる学校訪問事業終了に伴い、「児童生徒の確かな学力の育成」に向けて学校サポート訪問を実施した。学校のニーズに合わせて事務所指導主事が訪問し、授業参観と事後研究会を通して、授業づくりについて指導・助言を行った。その際、上記「授業づくりワンペーパー」や「学校教育指導の重点 各教科等の指導の重点」を活用し、確かな学力の育成につながる授業づくりのよさを価値づけたり、大事にしたい点について伝えたりしている。学校からは「継続的に指導していただいたことで研修を深めることができた」「分科会ごとに指導していただき、各教科の専門的な視点で話し合いができてよかった」などの感想が挙げられ、各学校の学力向上PDCAサイクルの推進につなげることができた。

### (2) 「学力向上研究協議会」の実施

R3年度から、学校研究ワンアップ研修会と学力向上研究協議会を分けて開催している。学力向上研究協議会は管理職及び教務主任を対象として、「学校組織からの学力向上」という視点からのメッセージを伝えることができた。

前半は、全国学力・学習状況調査の県及び庄内管内の結果や分析について、具体的に伝える場とし、各学校において授業改善に生かすことができるよう



にした。

後半は、国立教育政策研究所 直海知子 学力調査官から「算数・数学における確かな学力の育成に向けた授業づくり」というテーマで講話をいただいた。全国学力・学習状況調査の算数・数学の問題から、今求められている力とその育成に向けた授業改善の手立てについて、具体的な授業場面や参加者の事前質問に沿った形で話をいただいた。教科として付けたい力を明確にし、概念形成につながる授業づくりに取り組んでいくことで学力向上に大きく寄与することについて学びを深めた。

#### 【参加者の振り返りより】

- ・学力調査の問題には、現在求められている資質・能力育成のためのメッセージが込められていることから、その問題分析や教材研究を適切に行うことが授業改善へのよきアプローチとなることを再確認できた。
- ・直球は受けられるが、変化球に弱いという言葉が、まさにその通りだと感じた。本物のできた、わかったにつながる概念形成、授業改善をしていかなければならない。付けたい力とは何かを明確にしていくことの大切さを今一度確認したい。

### (3) 「学校研究ワンアップ研修会」の実施

本研修会は主に管内の研究主任を対象としており、学力向上の推進に向け、学校研究並びに授業改善推進の中核となる校内リーダー育成を図ることを目的としている。

参加者の傾向として、研究主任経験年数が2年以下の若手の研究主任が増えていることから、第1回研修会を年度初めに設定し、学校間のネットワークづくりにもつながるようにした。

第2回研修会は、福井大学教育・人文社会系部門 小林和雄准教授から「本格的な深い学びを実現する授業づくりのコツ」というテーマで講話をいただいた。教科の本質を学ぶための問題解決的学習、そのための授業研究の必要性など、今後の授業改善や学校研究の推進に向けて、改めて考える機会となった。

#### 【参加者の振り返りより（第2回）】

本格的な深い学びを実現するために、授業をどう考えていけばよいかについて学んだ。まずは、自分が目指す深い学びを具体的にイメージし、ゴールの姿を持っておくことが大切だと感じた。



第3回研修会は、「庄内地区における全国学調の結果から見えること」というテーマで講義・演習を行った。グループ演習では、今年度出題された問題や児童生徒質問調査の結果について分析を行い、授業改善に向けた次の一手を話し合った。参加者の振り返りには、「単元で身に付けさせたい力を教師が明確に持ち、授業に臨むことが必要だと改めて感じた」、「学習が好き、授業がよく分かった」という子どもたちの前向きな姿勢を大切に、望ましい場面設定を行うことを大切にしたい」等が挙げられ、付けたい力を基にした授業改善について共有が図られた。

### 3 おわりに

主体的・対話的で深い学びの視点からの授業づくりを通して、確かな学力の育成を目指していくために、組織的かつ計画的な教育活動が実施されるよう、今後も学校訪問や各種研修会での指導・支援を続け、本プランのねらいである「わかる授業、楽しい学校」につなげていきたい。